

氏名	小玉 亮子 KODAMA, Ryoko
所属 職名 学位 専門分野	人間文化創成科学研究科人間科学系 准教授 教育学修士（東京大学, 1986） 教育学
URL E-mail	 kodama.ryoko@ocha.ac.jp

## 研究者キーワード / Keywords

子ども  
家族  
教育  
ジェンダー  
歴史社会学

childhood  
family  
education  
gender  
historical sociology

## 主要業績

小玉亮子・広井多鶴子共著（2010）『現代の親子問題』日本図書センター，全363頁。

小玉亮子（2010）「少子化，ナショナリズム，ジェンダー—1910年代のドイツにおける出生率低下問題から—」，比較家族史学会編『比較家族史研究』第24号，pp.82- 95.

小玉亮子（2010）「＜教育と家族＞研究の展開—近代的孩子観・近代家族・近代教育の再考を軸として」，日本家族社会学会編『家族社会学研究』第22巻第2号，pp.154-164.

小玉亮子（2010）「近代ドイツにおける家族と国家，そして第三項—西洋教育史における家族研究の射程—」，教育史学会編『日本の教育史学』第53集，pp.126-131.

小玉亮子（2011）「戦後ドイツにおける家族の混乱と子どもたち」，対馬達雄編『ドイツ 過去の克服と人間形成』昭和堂，pp.43-70

## 研究内容 / Research Pursuits

比較の視点を重視して、子どもと家族について研究を行っている。主なテーマは以下の通り。

1、現代日本における子ども問題についての歴史社会学的研究  
現代日本において、児童虐待や少年犯罪、家族内の暴力や貧困といった社会問題について、社会がなぜそれを問題として議論しているのかについて分析している。

2、近現代ドイツにおける家族の変遷に関する社会史  
近代日本にとって膨大な影響を与えてきた近代ドイツを研究対象として、西欧世界の近代家族と近代的孩子観の変遷を検討し、そのことを通じて、近代社会それ自体がはらむ問題を明らかにすることを試みている。

3、幼児教育システムの比較社会的研究  
幼児教育について、その成立史を含めて国際比較をすることによって、現代における保育システムの課題を検討している。

I research on the social issues of childhood and family in Japan and Germany. I have the following three themes.

1; The historical sociology on the social issues of childhood.

People become to have a serious interest in the issues of childhood, for example child abuse, juvenile delinquency, domestic violence, poverty of family and so on. I analyze on when and how these have emerged as social issue, why people are so serious interested in the problems of childhood, and what causes people to think about the problems.

2: The social history of family in modern Germany.

I research on the process of formation of modern family and modern childhood. Mainly I research on German modern family in 19th and 20 th Century.

3: Comparative research on the early childhood education system.

I have a project of the research on the early childhood education in Japan, Germany and U.K. We try to compare the curriculums and systems and history of early childhood education of these three countries.

## ■ 教育内容 / Educational Pursuits

学部・大学院ともに、歴史社会的アプローチから子どもと家族と教育に関する講義をしている。キーワードは、教育文化である。教育文化とは、広い意味で、子どもたちが成長していく過程に関わる全ての営みを指すと考えている。講義にあたっては、特に時間的・空間的比較の視点を重視し、喫緊の問題を広い視野から検討することを試みている。

担当科目は、大学院では、比較教育文化論特論、子ども社会学特論を担当し、学部では、人間関係学、児童社会文化論、及び、教職科目の生徒指導の研究を担当している。

I give some lectures of the historical sociology of childhood and Family. The key word of my lectures is the culture of the education. I think that the culture of education indicates the whole process of children's growth. Especially the comparative perspective is important, because the research of childhood requires an attempt to think in larger perspective.

Graduate course: Comparative study on education and culture, Sociology of childhood.

Undergraduate course: Child study from socio-cultural perspectives, Human relations

Teaching course: Guidance in school.

## ■ 研究計画

現在、個人研究として、科学研究費（基盤C）で、「ヴァイマル期ドイツにおける消費社会の進展と家庭教育に関する社会史的研究」において、個人研究をすすめている。20世紀初頭から戦後ドイツにおいて、子どもと家族がどのように議論されたのか、継続して研究を続けている。

また、共同研究としては、日本証券財団からの奨学金で、「格差是正に向けた就学前教育の比較社会学的研究—日米英独の比較から」をテーマとして、近年の幼児教育改革の比較研究を続けている。

いずれも、日本とドイツを対象として子どもと家族について、比較の視点から研究をおこなっているものであるが、もう一つ重要な視点として考えているものに、ジェンダーの視点がある。子どもと家族の問題を考えるに当たり、ジェンダーの視点は不可欠であると考えている。この点を重視しながら、さらに研究を続けていきたいと考えている。

## ■ メッセージ

面白いことはあちらから来てはくれません。自分でどんどん探しに行ってください。私でお手伝いできることはお手伝いしますので、一緒に面白いことをみつけていきましょう。